

第5回みなとまちづくり研究会

第一部 講演「海で生まれた『山紫水明』」

ノンフィクション作家 池田 明子

第二部 座談会「講師を囲んでウォーターフロントを語る」

藤田 武彦 木本 英明

池田 明子 橋間 元徳

日 時：平成22年6月1日 14：26～16：11

場 所：ホテルアジュール竹芝 天平の間

津田 大変お待たせいたしました。ただいまから第5回みなとまちづくり研究会を開催します。

まず第一部として、「海で生まれた『山紫水明』」という題で、ノンフィクション作家の池田明子先生にご講演をちょうだいしたいと思います。それでは先生、どうぞよろしくお願ひします。(拍手)

池田 池田でございます。ふつつか者ですのに、今日は日本の麗しい海を守ってくださっている皆様の前でこうしてお話をさせていただいて、まことに光榮です。

第二部は、藤田様を初め、皆様とご一緒の座談会です。多分皆様はリーフレットでお読みになったと思いますけれども、藤田様が広島時代に住んでいらっしやったマンションの地下が酒蔵でして、資料のほうにも酒蔵の紹介がありますけれども、そちらの蓬莱鶴というのは大吟醸酒の生酒です。

普通に市販されているものは火入れをしています。皆様は技術の世界で生きている方が多くいらっしやいますけれども、日本の技術力の高さの証明だというふうにも考えられます。ヨーロッパに先んじて低温消毒法を發明しまして、今もそういうふうにして低温で消毒をしていますけれども、生酒は全く(火入れをしません)。

皆様、蔵へ行かれたことがある方はいらっしやいますでしょうか。酒蔵で飲むお酒はとってもおいしゅうございます。それは本当につくったそのままです。昔ですと、しばらくすると腐敗してしまいます。でも、今は冷蔵設備が整いましたから冷蔵庫で保存しまして、クール宅急便で前日にお届けしました。ですから、第二部の座談会は、私どもパネラーもお聞きくださる皆様も、ともにほんの1杯ずつですけれども……。生酒というのは加水をしてありませんからちょっと濃いので、お水も一緒にサーブするようになっています。

おつまみはなしですが、私は本当においしいお酒をいただくときはおつまみが要らないのです。おいしいものをいただくときはお酒を飲みたくなるというたちなんですけれども、この話も後でちょっと触れたいと思います。

まず、山紫水明という麗しい四字熟語をつくった頼山陽について先にお話しさせていただきたいと存じます。頼山陽というと「えっ何? 右翼?」とかいうような感じで言われることが多くありました。といいますのは、山陽がもしその当時知っていたら「やめてくれ」と彼自身が叫んだと思われるぐらいに、太平洋戦争になる前、天皇崇拝に頼山陽の書いた『日本外史』が利用されました。山陽神社をつくろうかなんという話までできていたぐらいでした。

それが2回目ですけれども、第1回目は幕末の明治維新のころ、明治維新をなした勤王の志士たちが頼山陽の『日本外史』を愛読して、その心に揺るがされたと言われていました。実は近藤勇は幕臣ですけれども、近藤勇も懐に頼山陽の『日本外史』を挟んで歩いていました。いわば『日本外史』を読んでいるというのが、当時のインテリ的な格好よさに通じていたんだと思います。

山陽は広島の人であるということ、私は広島に嫁いできては長い間知らなかった

んですけれども、生まれたのはお父さんの頼春水が大坂で私塾を営んでいたときです。お父さんは染物屋の長男だったんですけれども、身分制度の厳しいあの江戸時代にもかかわらず、幕府の儒官に抜てきされました。要するに、侍になったのです。それで山陽はお母さんとともにお父さんの（抜てきされた）広島へ帰ることになりました。

父親の春水というのは儒学者でありまして、江戸時代の世継ぎのお殿様はずっと江戸で育ちますから、山陽の若いころはその教育係としてほとんど半分以上は江戸へ単身赴任をしていました。ですから、頼山陽にとって生まれたのは大坂、お父さんがいないのでお母さんにかわいがられて問題児となり、江戸へ1年ほど遊学しました。

森鷗外が『伊沢蘭軒』という小説を明治時代に『東京日日新聞』に連載しましたときに、実は頼山陽ではなくていどこだったんですが、それを頼山陽とわざと間違えて書いたのか、とにかく頼山陽を狂言回しに使ったというぐらいに明治時代もまだ有名でした。そんな名人だったんですけれども、みるみるうちに忘れ去られてしまいました。今ここでも頼山陽の名前さえご存じないという方がたくさんいらっしゃるんじゃないかと思います。

さっき申しましたように大坂で生まれて、青少年時代を広島で過ごすんですけれども、江戸へ1年余り遊学したときに夜遊びを覚えてしまいます。広島へ帰ってきてそれをまた復習し始めたら、お父さんの厳しい春水先生にしかられてしまいます。春水先生が江戸へ単身赴任しているときにそのお父さん、だからおじいさんに当たる人が竹原で亡くなります。そのときに頼山陽をお父さんの名代として竹原に遣わします。

そうしましたら山陽は懐には香典を持っていて、ちょうどたまたま従者を連れているだけの割とフリーな身だということで、竹原へ行かないで、脱藩をしてそのまま京都へ行きました。というのは、京都にちょっと前まで春水の塾へ来ていた悪友がいたのです。その遊び友達のところへ脱藩をして行きました。今でいうならば、パスポートなしの密出国です。

当時、広島藩では嫡男、跡取り息子が脱藩をしたら、追い討ちの刑と言って追っかけて切り殺すと。追いかけてなくても、とにかく死罪だという大きな罪を犯してしまいます。本当は死ななければいけないところを、お父さんの春水が若殿の教育係だったということで大いに根回しをしまして、ちょうど江戸にいたということもありましたし死罪は免れました。自宅謹慎ということで、罪を償うための歳月を5年間送ります。

皆様にお求めいただきました本の中に出ていますけれども、そのときに離れ家を建てまして、その中で5年間、出歩いて遊び暮らすことができないものですから、人が変わったように勉強しました。

そういう罪を犯す前になるんですけれども、数え年で14歳のときに——と申しますのはちょっと飛ばしてしまいましたが、レジュメの最初に返ってもう一度ごらんください。「頼春水、静の長男として、安永9年12月27日（1781年1月21日）に大坂の江戸堀川に面した春水南軒で誕生し」とあります。安永9年12月27日というのは、当然のことながら旧暦です。この年、特に小の月ですから29日までしかありませんでした。頼山陽は27日

に生まれて、それが1日目です。12月28日は2日目、29日が3日目、その次がもう安永10年の元旦になりますから、生まれて4日目で2歳になっているのです。

私の年ごろだとまだ数え年とか満とか言いましたけれども、皆さんもちょっとシニアな方は数えて幾つ、満で幾つというような呼び方を覚えていらっしゃると思います。数え年というのはお正月になると年がふえます。だから山陽は生まれたときに1歳、生まれて4日目で2歳になったという、生まれながらにして早熟を運命づけられたような人でした。

大坂の春水南軒の家からは掘のためにつくった江戸堀川から、特にカモメが飛ぶのが見えたというふうに春水が後に思い出して書き残しています。ですから、水にも非常に縁が深い誕生でした。

次に書かれていますのは亡くなったときのことで、「天保3年(1832)に京都の鴨川に面した水西荘で没した(53歳)」とはいっても、さっき申しましたように51歳と半年という感じです。

後半生は京都で過ごしました。さっき申しましたように脱藩の罪を犯して、その後は家から出てもいいことになりましたけれども、嫡男は竹原の春風というおじさんの長男、いところが継いでいました。そのとき、実は山陽はもう結婚していました。最初の奥さんの子供が育っていたんですけれども、山陽が幽閉されているうちに藩の命令で離縁されていました。

そうやって竹原で幽閉生活を送って、その後また自由の身になってもいわばフリーターです。何もすることがありません。何をしたかという、江戸の遊学時代に覚えた夜遊びを再開したということです。そういう悪いことをしない、病弱で問題児ではありましたが、勉強はよくできました。問題を起こして、お父さんは半分ほどおりませんでしたけれども、おじさんの杏坪と大坂で結婚した静というお母さんがなかなか教養の高い女性で、このおじさんとお母さんが先生になって山陽を教育しました。ですから14歳のお正月というと実質的には12歳ですけれども、すばらしい詩をつくりました。

ちょっと補足で、横道にそれますが、私たちは詩というと島崎藤村の詩とか、北原白秋の詩とか、皆さんも小中高校のときにおつくりになられた詩を連想なさいますが、江戸時代で詩というと漢詩でした。それが明治になっていわゆる今という普通の詩、新体詩と最初は言われていましたけれども、藤村や白秋の詩が詩になって、中国の詩が漢詩と呼ばれました。

実は中国では、漢詩というのは漢の時代にできた詩です。ですから唐の時代にできた詩は唐詩、宋の時代にできた詩は宋詩というふうに言います。中国では漢詩は古典的なクラシックな詩という意味もありますけれども、順番が逆で唐のほうが前ですが、唐詩というのは日本で有名な李白とか杜甫の詩です。宋詩は日本ではあまり有名ではありませんけれども、割合現代的なものです。

だからその時代時代に生まれた詩を読みましたが、中国から来た先生が、「私は李白や杜甫の漢詩が好きです」などと言うとびっくりしてしまうわけです。大学の漢文や中国文学

の先生までそういう表現を使っています。「日本での漢詩というのは、中国の漢詩とは意味が違うらしい」ということにだんだん気づいてきたということを書いているらしいです。その引用をこの本にもたしか載せたと思いますから、後でお読みになったときにそこが出てきたら「ああ、あれね」と思ってください。

山陽が生まれたのは大坂で、若い青少年の時代だけを広島で過ごします。後半は京都で育って、京都で亡くなりました。それなのになぜ広島の人なのかと言われますけれども、お父さんが米国勤務をしていたのでニューヨークで生まれて、日本で小中学校を過ごして、大人になってパリへ行きソルボンヌ大学の教授になってパリで死んだけれども、れっきとした日本人というのとちょうど一緒です。だから、山陽は当時でいえば国際人でした。(春水が)大坂の静と結婚したのも、今の感覚でいえば国際結婚をしたというような感じです。

その教養深い静さんに育てられて、体はちょっと弱くて、いろいろ問題児ではありましたが、一人っ子でお父さんはいないというとうとうどういふ感じの男の子になるかご想像がつくと思いますが、14歳のときにすばらしい詩をつくっています。山陽が晩年(のとき)に企画するんですけども、生きていうちには出版されずに、亡くなってから出た詩集の一番最初に載っている詩です。皆様の資料では4ページ目だと思います。

癸丑の歳 偶作る

十有三春秋

逝く者は已に水の如し

天地 始終無く

人生 生死有り

安んぞ古人に類して

千載 青史に列するを得ん

青史というのは歴史書のことです。昔、青竹を削って、そこに暦を記しました。それで歴史書のことを青史というふうに言いました。意味はそんな難しいものではありませんが、逝く者ははや水の流れるごとくに去った。

天地は始めも終わりもなく悠久に存在するが、

海の姿なども時々汚染されたりしますけれども、ほとんど変わりませんね。人間は今だったら生があつて、死があります。けれども、僕は昔の偉い人のように1000年後まで歴史書に載せられるような人になりたいと。随分大きな野望を詩にしたためました。

漢詩というのは声を出して読まないで、そのよさが反映されません。さらに本当は白文と言われている上の漢字ばかりのものをみて読むといいということですが、私はとてもできませんので、下にルビもたくさん打って読み下し文をつけています。これをまずは1節ずつ皆さんと一緒に読んでいきたいと思っています。

十有三春秋
逝く者は已に水の如し
天地 始終無く
人生 生死有り
安んぞ古人に類して
千載 青史に列するを得ん

ありがとうございます。恐れ入りますが、通してもう一度皆さんとご一緒に。では、どうぞ。

十有三春秋
逝く者は已に水の如し
天地 始終無く
人生 生死有
安んぞ個人に類して
千載 青史に列するを得ん

いいでしょう。このすばらしい詩を14歳になったお正月といっても、実質的には12歳と4日目につくりました。けれども、本当を言うとこれは改作しているんです。左側に書感と書いてあるのが原作です。

有名な詩というのは、軸に幾つも書いてあります。広島隣の町の福山の古美術商のおじさんに「頼山陽は贋作が多いそうですね。100 あったら 99 がにせものだと言うそうですね」と言うと、そのご主人が「100 あったら 101 贋作だ」と澄まして言うんです。それぐらいにせもの多くて、にせものとわかって、ちょっと怪しいと思ってもみんなが求めるぐらいに人気があった人です。

おかしいと思ったのは、忌中の年にたまたまつくるという詩の軸を1点も見ることがないからだったのと、それからリーフレットにも書いていただきましたけれども、最後に漢文や漢詩のご指導をいただいた京都大学准教授の道坂先生が「このもとの詩もいいね。こっちのほうが若々しいね。素直だね」とおっしゃったのです。そちらを読んでもみます。

十有三春秋
春秋去ること水のごとし
何れの時にか 吾が志成り
千古 青史に列せん

簡単な詩ですから、これも皆さんと一緒にお願いします。では、どうぞ。

十有三春秋
春秋去ること水のごとし
何れの時にか 吾が志成り
千古 青史に列せん

これこそまさに12歳と4日目につくった詩です。

さっきも申しましたように、私は広島に嫁いでからも長い間、頼山陽が広島出身だと知らなかったのです。最初にそれを教えてくださったのは、私は生まれて育ったのは金沢ですが、ご近所に住んでいらした、金沢美大という美術学校の先生を広島県立美術館にご案内したときに「ろくな焼き物が広島にはないな」と。けれども、山陽の軸を見て「これはいい。山陽はおもしろい男だな。別にハンサムでもないし、地位もないし、金もないのに、各地に恋人をつくって歩いた」と。

先生は1回結婚したけれども離婚なされて、その後はお1人だから集中講義などで全国をいつもうろうろして、友達に「あの先生は旅ガラスだね」と言われるほどあちこちにいらっしゃったものですから、「山陽があんなにもてたのに、僕が全然もてないのはおかしい」というのを言外に含んでおっしゃっていました。

なぜかというのを事あるごとに皆さんにお尋ねするんですが、ずばり答えた方はいらっしやいません。でも、山陽の生涯を見ていくと、要するにまめなんだということがわかりました。弟子の男の子に対してもすごくまめなんですけれども、まめに世話をするのが女性にもてたコツだと思います。

山陽は自由の身になってもフリーターですから何もすることがなく、ふらふらしているときに竹原へ行きました。『竹原舟遊記』にあります。今日のようなクルージングをして、そこで平田玉蘊という尾道の女性と初めて出会います。その後、菅茶山の廉塾で塾頭のような仕事をするんですけれども、結局落ちつきませんで、お父さんの3回忌に広島へ帰った後そのまま九州へ旅行して長崎へ行きます。

当時の日本人は中国にも非常にあこがれましたが、長崎は割とエリートの人たちのあこがれの的でした。中国人ももちろん来ますから直接詩の応答をしたり、詩をつくってもらったり教えてもらったりできるということで、九州旅行を1年以上しました。

昔というのは、あちこちで絵をかいたり、書を書いたり、お医者さんだったら診察をしたりしてお金を稼ぎながら旅行をします。何か得意わざを持っていると、別に旅費がなくても得意わざが旅費になるといういい時代でした。

今度は瀬戸内海の多島美の静かな美しさとは違って、天草灘で非常に大胆な詩をつくります。レジュメの5ページ目にありますが、これをまたご一緒に読んでみたいと思います。一番左側に語句の意味がありますので、ちらちらと斜めに読みながら聞いてください。

天草洋に泊す
雲か 山か 呉か 越か
水天 髣髴 青一髪
萬里 舟を泊す 天草洋
煙は篷窓に横たわりて 日 漸く没す
瞥見す 大魚 波間に跳るを
太白 船に当たりて 明 月に似たり

あれは雲だろうか、山だろうか、それとも呉の国か越の国か。
水と空のあいだに、髪の毛ひとすじほどの青い線がほのかに見える。
万里の旅の途中（自分の九州旅行のこと）、舟を着けたのは天草の海。
船窓にもやがかかって、日はようやく沈んでいく。
ふと目を横切って大きな魚が波間に跳躍し、姿を消した。
あとには宵の明星（太白のこと）が舟の正面に月のように明るく光っている。

これもまたもう一回、さっきのように読んでみたいと思います。

雲か 山か 呉か 越か
水天 髣髴 青一髪
萬里 舟を泊す 天草洋
煙は篷窓に横たわりて 日 漸く没す
瞥見す 大魚 波間に跳るを
太白 船に当たりて 明 月に似たり

では、通して一緒にもう一度お願いします。

雲か 山か 呉か 越か
水天 髣髴 青一髪
萬里 舟を泊す 天草洋
煙は篷窓に横たわりて 日 漸く没す
瞥見す 大魚 波間に跳るを
太白 船に当たりて
明 月に似たり

お求めいただきましたご本にはグラビアがついています。その最初のページは、さっき申したように山ほど贋作があるのですけれども、これは尾道の豪商です。ほとんどの豪商

はつぶれましたが、橋本様のお宅は今も残っています。弟子であり、スポンサーであった橋本元吉という人のためにかいたという〔散文?〕が残っています。

すごく癖があり、これを唐用の書と呼んでいます。そういう書体だったからまねやすかったこともありますけれども、非常に響きがよくて人気がありました。あまりに人気があったので、明治時代の山陽の評判というのは〔(人気を)二分した?〕ということです。

先ほど申しましたように、中国には海の詩がほとんどないのです。どうしてかということ、山紫水明という言葉も、さっきの竹原のイブニングクルーズで「山紫水明。継ぐに蒼然の色を以てす」と山陽は書きました。山紫と水明はそれぞれあります。山紫水明は最初は瀬戸内海の夕暮れの景色を表現したもので、そのときは山紫水白と書きました。それを山紫水明に直しました。すみませんが、これについては本をゆっくり読んでください。

山紫水白だと平仄という漢文の約束に合わないのです。昔は平仄が合うと言いましたけれども、それが合わないということで直したのもありますし、日本語でいうと s a、s i、s u、me ということでここまではみんな s で、a (あ)、i (い)、u (う)、e (え) と下がっていくという、なかなか考えられた言葉でした。

さっき申しましたように、中国ではなぜ海の詩がないかということ、海と晦が逆かもしれませんが、「海は晦なり」と言われるぐらいに……。中国は中華思想で、自分たちが住んでいる大陸の真ん中が文明の発達したところで、それが四方に散って行って、どろどろとした汚いものが流れるところが海だと。だから、「海」と「晦」は一緒だというふうに言っています。日本ではそういうことはなくて、先ほどの山紫水明が生まれたような美しい風景です。

この、世界に誇る美しい風景を皆さんは育て、なおかつ守っていらっしゃるということで、本当に尊敬しています。私は眺めるだけで、何も直接的に役立つことはできないのでまことにお恥ずかしいですが、どうぞ皆様のお力で美しく美しい日本の海が守られていきますことをお願い申し上げます。

随分散漫な話になりましたけれども、ちょっと一息入れて、今度はお酒を飲みながら座談会をと思っています。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

津田 池田先生、どうもありがとうございました。

何かここで先生にお伺いしたいことはありますか。何かあれば第二部の座談会のご質問していただければと思います。それでは、これで池田先生の講演を終わります。先生、どうもありがとうございました。(拍手)

それでは、座談会の準備をとり行いますまで、もうちょっとこの会場でお待ちいただきたいと思います。

(休憩)

津田 それでは準備も整ったようですので、ただいまから第二部の座談会を開催したいと思います。「講師を囲んでウォーターフロントを語る」と題しまして、藤田武彦様、木本英明様、池田明子先生、橋間元徳事務局長の4人で行います。

これからの司会は当協会の橋間専務理事にかわりますので、ひとつよろしく願いいたします。

橋間 それでは、これから第二部の座談会を開催したいと思います。4時までということであと40分ぐらいですが、「講師を囲んでウォーターフロントを語る」ということです。

ちょっとお待たせしましたが、最初に水を配って、その後いま酒を配っているところです。酒をいただきながら、皆さんと一緒にウォーターフロントを語るということにさせていただきます。

実はこの酒は、池田さんが広島酒を皆さんにぜひ飲んでほしいということで、わざわざ持ってきていただいたものです。しかもこの酒は、昔、藤田さんが下宿をしていた下宿屋の酒だということだそうです。この酒についてはパンフレットに書いてあります。「左党の私にとって」と書いてありますが、また藤田さんから酒の話もしていただきたいと思います。

この4人に限らず、ぜひ皆様のうちの何人かの方にはこの座談会に参加してほしいと思いますので、ご協力をお願いしたいと思います。どういうふうな話になるのか、何も4人で打ち合わせをしていませんので、とにかく請う期待ということです。

まず「講師を囲んでウォーターフロントを語る」ということですので、池田さんに今まで話をいただきましたけれども、酒をぜひ皆さんに楽しんでいただきたいという思いも込めて、先ほど話し足りなかったこと、あるいは酒の話などをまず最初にしていただけませんか。

池田 恐れ入ります。多分、皆様はリーフレットをお読みになっていると思いますが、藤田さんの、下宿ではなくて立派なマンションですが、その地下室を酒蔵に変えた。日本で初めてだと思います。今もまだ唯一ではないかと思えます。非常に限られた空間ですが、江戸時代から続く蓬莱鶴というすばらしいお酒です。

今は車の酔っ払い運転がいろいろ問題になっています。車だったらドライバーが飲んじやいけないので横で飲むというわけにはいかないけれども、船というのは伸びやかだからお酒を飲みながら語り合うことも可能ではないかと。ですから、今日はまずこの座談会も、皆さんがリーフレットをごらんになって「藤田さんはどういうお酒をつくっているところにいらしたのかな」と思われるだろうから、お酒のおいしさを口でどれだけ説明してもつまらないわけであって、召し上がっていただいていい気持ちになって、フロアの皆さんも私たちも気分よく語り合おうではないかという気持ちでプレゼントをしたくなったというのがきっかけです。どうぞ、まずお水を召し上がってから、ごゆるりとお酒を味わってくださいませ。

橋間 ありがとうございます。この酒のことを藤田さんにもう少し詳しく説明してい

たきます。

藤田 いま皆さんの机にあるのがそうで、氷入りですか。こちらにも配っていただきましたから、一緒に皆さんと堪能したいと思います。

17年に広島にあります中国地方整備局に赴任したんですけれども、そのマンションを宿舎として借り上げていたわけです。そこがたまたま原酒造さんの本店だったということです。地下でまだ酒づくりをやっておられます。

200字ぐらいで推薦をと言われたんですけれども、いささかオーバーしたんでしょうか、私は決して左党ではありませんで、ちょっぴり左党です。「いささか左党」と書いたんですけれども、多分200字をオーバーしたのでカットされたのでしょう。お酒はそんなに強くないと思っています。

確かに地下でつくっている酒が蛇口で飲めるほどではなくて、地下におりていけばそこで販売している、試飲もしているということでした。そこに本が並べてあり、最初に手にとったのが池田明子先生の手書かれた『吟醸酒を創った男』という本でした。

実は私も田舎は金沢ですけれども、池田先生も金沢ご出身の方だということで初めて存じ上げて、その後何度か機会がありましておつき合いさせていただいているということです。酒の紹介ではなくて恐縮ですが、以上です。

橋間 「ウォーターフロントを語る」ということですが、このパンフレットに木本さんも書かれたように、私もそうだと思いますけれども、山紫水明というのは中国で生まれた言葉だとばかり思っていたら、実は日本で生まれた言葉であるということと、さらに山でつくられたと思ったら海、瀬戸内海でつくられた言葉だということには本当に私も驚きました。

木本さんもそれに驚かれたことを書いていますが、そこら辺について感想をお願いします。

木本 その前に、先生、おいしいお酒をどうもありがとうございます。一口飲ませていただきましたが、なめらかな感じになってきましたのでぺらぺらしゃべりまくるかもしれませんが、お許してください。

山紫水明という言葉ですが、いま橋間さんが言われたように、私も中国の言葉だと思っていたらそうではなくて、頼山陽さんのつくった言葉だと。しかも同じようにかすみたなびく山の風景だと思ったら、これはまさに海だということです。言われてみれば瀬戸内海の多島海の夕暮れの情景、景色はやや紫がかかったかすみに煙るといいますか、そういう風景ですから、なるほどという感じを抱きました。大分前ですけれども、神戸に勤務していたころ、よく瀬戸内海にも行きました。ああいう情景、風景だったかと、改めてそういう感じがしています。

日本にこういう四字熟語みたいなものが本当にあったのかなと思いました。四字熟語はほとんど中国の言葉ですから、頼山陽さんは漢詩に非常に造詣の深い方だったからこういう言葉が生まれたということ、改めて日本人として一つの誇りに思うというような感じ

がしています。

橋間 宣伝といたしますか、このパンフレット自身がなかなかいいと思います。パンフレットに書いてありますように、『山紫水明』という本は今日の発行、しかも我がウォーターフロント協会の発行です。こんな本をつくったのは初めてですけれども、山紫水明という言葉に私も感動しました。これはウォーターフロントを語るのに非常によく、ぜひこれを今後読んでほしいと思いました。

このパンフレットに3人の推薦文がありますが、藤田さん、木本さんの下に山本昌博さんという方が書いておられます。これを見ると「松山に帰郷のおり、フェリーから見る日の出、日没の際の深紅の島、銀色の海……このような見事な光景の中から山陽の山紫水明は生まれたのでしょうか」と、なかなかいいことを書かれます。山本さんが今日はわざわざ松山から来ておられますからご紹介します。(拍手)

山本さん、感想を一言お願いします。

山本 山本でございます。えらいところで振られてしまいまして恐縮です。

推薦文に書いていますけれども、私は長年単身赴任をしていました。藤田局長が広島におられたときも当然ですけれども、毎週土曜日に帰っていました。時期は晩秋でしたか、日が出てしまいますと明るくなるので、朝の場合は日の出のちょっと前です。山が本当に紫色に映りますし、海水は黄緑ということで、いい光景を楽しみに単身赴任をしていました。

今日はお世話になった池田先生の本が出るということで来させていただきました。先生、おめでとうございます。

池田 ありがとうございます。

橋間 皆さんご承知のように、瀬戸内海は実にいいというのは、山本さんみたいに日々見ておられる方はよくわかると思いますけれども、私もこちらに転勤する前は神戸に5年以上いました。神戸も瀬戸内クルーズをぜひ物にしたいということで頑張っていました。あとはほかの大阪や下関あたりでも随分……。何とか瀬戸内クルーズを物にしたいと思います。

行って見てわかると思いますけれども、瀬戸内海というのは日本の国立公園第1号です。行けばいいと思いますけれども、なかなか行くチャンスがありません。そこで山紫水明という言葉ができたというのは、言われてもっともだなというふうに思いました。

池田さん、山紫水明の説明等も含めて補足なり、もう少しご説明していただければと思います。

池田 実は私は今、海が見える団地に住んでいます。生まれ育った金沢はちょうど山と山の間で町が発達しまして、ちょっとした小高いところに金沢城があります。私はそのすぐ近くなんですけれども、ちょうど穴になっているから空もそんなにたくさん見えないという感じで、袋小路に育ちました。

海というのはどんどん近づくと、地面もだんだん砂浜になって、松林があつて防風林で

す。遠浅の砂浜がずっとあって、その向こうに海があると。日本海で一番すばらしいのは冬の荒れた海です。

「山紫水白。継ぐに蒼然の色を以てす」という言葉を最初に見たときにぴんとこなかったのです。海の色が白くなるというのはどういうことかという感じでした。ところが、そのときはまだ今の住まいではなかったものですから、その追体験のためにクルージングをしたりいろいろなところへ連れていってもらったりしまして、山紫水白というのはまさに字のとおりだと思いました。

それだけじゃなくて、典故と言って、昔の人の立派な言葉を利用して新しい言葉をつくるというのがいわば教養人の本当に深い教養ということにその時代はなっていました。山紫と水明もそれぞれちゃんとした意味があります。それを二つつないで、さっきの a、i、u、e と母音が下がる言葉を山陽は何年もかけて練ったんだと思います。

最初は山紫水明処という、いわゆる書斎のようなところの固有名詞として使っていました。最初は瀬戸内海のほうで使ったのですが、気に入って何度も使って、亡くなった水西荘にも山紫水明処と呼んだ離れをつくりました。

どうして山紫水明なのか。不思議ですけれども、漢文学というのが大学の講座にあって、中国文学といますけれども、最初 20 年ぐらい前に習ったときは、その先生たちが「私の専門は杜甫です」とか「私の専門は李白です」という感じで、日本人の漢文や漢詩というのは割とレベルが低いというふうに言われていました。ところが、中国で漢字などがああいうふうに変わって、本当にいい漢文や漢詩が残っているのは日本じゃないかと思います。

どうして山紫水明の四字熟語が漢字の本家の中国で生まれなかったのかというと、山紫水明に値する風景がないという一言に尽きると思います。和辻哲郎が『風土』という本にそれを書いていますけれども、揚子江の川下あたりというのは全く泥海です。さっき黒板に書きましたように、中国の文明が端々にずっと行って、泥になって汚いものがあるのが海だと。

ところが日本は結婚式などでも「四海波静かにて」という歌を歌いますけれども、海というのは非常に美しいし、それだけじゃなくて日本を守ってくれたし、独自の日本の文化を育ててくれるのも海だと思います。だから、もっともっと海を見直していきたいというのが私の切なる願いです。

橋間 藤田さんは広島に 4 年か 5 年おられて、瀬戸内のきれいな山紫水明を見られたそうですね。感想をお願いします。

藤田 4 年半ほど広島におりましたけれども、池田先生の薫陶を受けて、時々意識的に広島から瀬戸内海を眺めていました。

その前に私の頼山陽というのは、池田先生が先ほどいろいろお話をして、皆さんも頼山陽は広島の間人だご理解いただいたと思いますけれども、「鞭声粛々夜河を渡る」という川中島のあれが頼山陽の詩ですね。宇治川の合戦でも躍動感のある、わくわくするような描写で表現しているのは大体頼山陽です。頼山陽記念館というのがあって、そこでもいろ

いる勉強させていただきました。

橋間さんが言われましたように、国立公園の第1号は紛れもなく瀬戸内海です。それは明治時代初期だったと思います。その前に江戸時代に、オランダで医者をしていたシーボルトが江戸幕府に出頭を命ぜられます。喚問ですね。日本の宝物の浮世絵、書画をヨーロッパにどうも密輸している、横流しをしていると。でも、本人は日本のすばらしい文化に触れてほれ込んで、それを少しづつためて本国に送ったようですけども、それが密輸に当たるといことで江戸幕府から厳しい喚問を受けました。

江戸に行く途中で、瀬戸内海の海を船旅しています。そのときに彼も瀬戸内海にほれ込んで、スケッチブックをたくさん残しています。そのスケッチブックを見ると、スケッチもすごいんですけども、行く先々で瀬戸内海の多島美、島々の絵を残しています。そういうすばらしいところです。

もう一つは多分環境、その雰囲気ですね。池田先生がさっき『竹原舟遊記』の詩の中で最初に山紫水白と歌われたとおっしゃいましたが、これも池田先生の本によると、そのときに頼山陽はおじさんの家で酔っぱらって眠ってしまいます。翌朝でしょうか、船でこれから瀬戸内海に遊びに行くぞと皆さんに声をかけますが、本人は二日酔いで頭が痛いので行きたくない、このまま寝かしておいてくれということでしたが、それを無理やり連れ出したんでしょうね。船の上でふと気がついたら、うら若い美人の女性が2人いました。それは尾道の豪商の娘ということになっているようですが、頼山陽はがばつとはね起きて、有頂天になってという言い過ぎかもしれませんが、気分も高揚した中で『竹原舟遊記』を書いたというふうに向っています。

だから、すばらしい景色ともう一つはすばらしい環境、そのときの周りの雰囲気が相まって山紫水明という言葉が生まれたんだらうというふうに理解しています。

橋間 先ほど藤田さんのおっしゃった、女性と一緒に船遊びをするということが1800年ごろになされたというのは驚くべきことです。その女性が平田玉蘊という人で、ここにあるのは池田さんが復刻されましたが、すごくレベルの高い人たちがあの時期に女性を入れて歌会みたいなことをする、しかも江戸じゃなくて広島竹原あたりでというのは本当に驚くことです。そういうことを私どもができるのかと思うと、本当に当時のレベルの高さに感心します。

時間ばかりが過ぎましたけれども、漢詩を皆さんで歌うのはなかなかいいですね。山紫水明等やこの話について一言発言したい方がおられたら、フロアからどうですか。フジモリさんは万葉集に詳しいですが、ここで一句つくりませんか。詳しい方がおられます。

フジモリ 質問していいですか。フジモリといいます。

もう既に出たのかもしれませんが、出ていないなら確認したいのですが、山紫水白という言葉は紫と白が対になっています。水白という言葉はそもそもどういう意味を持っていて、明はさっきの母音みたいなことがありますけれども、それによって意味が変わってきているのかどうかということをお教えいただきたいと思います。

池田 山紫水白が先にできたんですけれども、白という字は私たちのホワイトという意味だけじゃなくて、透明できらきら光り輝くという意味もあるんだということをご指導いただいた道坂先生がお書きになっています。

私は朝な夕なに海が見えるところに住んでいますが、全く乳白色になります。本当に見たとおり、山は紫、水は白という状況です。朝夕のときもそうですけれども、ちょっと曇ったようなときもそうなんです。でも、先生がおっしゃることもわからなくもないですけれども。

山紫水白という、白を最初に使ったときにも、明の意味も含んでいたと思います。けれども、『竹原舟遊記』というのは文です。この本（『山紫水明』）の巻末に載せてあります。さっき黒板に書きましたけれども、詩にするには平音と仄音がありまして、その順番を守らなければいけません。山紫水白だったら平仄が合いません。山紫水明にすると平仄が合うと。詩にするためにかえたというのがありますし、頼山陽は響きのいい言葉をつくるのがうまかったのです。字画が少なくて響きがいいということに山紫水明はぴったり合ったんだと思います。

『日本外史』は超ロングセラーになったんですけれども、あれもすごく簡単な字画の少ない漢字で、そして響きがよかったというのは一緒だと思います。

橋間 よろしいでしょうか。

フジモリ はい。

橋間 ほかに何かありますか。

カワサキ レベルの低い質問ですが、教えていただきたいと（思います）。カワサキと申します。

今日は私の大好きな金沢ご出身の方のお話ということで大変勉強になりました。また漢詩を声を出して読むというのは、一つの漢詩を除いて60年ぶりぐらいです。一つというのは「少年老いやすく遊びつくしがたし」で、学はとつくの昔にあきらめています。あと何日遊べるかなと思って、その一つ以外は60年ぶりぐらいに声を出しました。

私の伺いたいレベルの低い話というのは、最も好きな歌の一つに「瀬戸の花嫁」がありますが、あれはどこを言っているのかというのを教えていただきたいのです。というのは最も好きな歌の一つで、時々ま口ずさんだりするんですが、実は私も昔、神戸に勤務していたときに広島離島をほとんど回りました。どこだろう、どこだろうと思いながらわからずじまいなので今日教えていただければ、あるいは好きなところをイメージすればいいということであれば、どこをイメージしたらいいのかと。好きなところだからあなたの好きなところとおっしゃらないで、教えていただければと思います。

ちなみに一つだけばかな話をしますと、ここに瀬戸内海の絵がかかってあるとよかったと思います。どうしてかといいますと、普通、我々は北側の地図を見ますが、あれを逆さまにしてみると女性が横たわっているように見えます。ちょうど大阪湾が胸になって、香川のほうがおしりでしょうか。それは人の想像によりますが、帰られましたら一度、瀬戸

内海の地図を逆さまにして見ていただきたいと。できればお酒を飲んで見ると、なお想像たくましく見られると思います。

私の伺いたいことは、瀬戸の花嫁を、瀬戸内海の地図を逆さまにしながら見るときにどこを見たらいいのか教えてください。アルコールのせいで大変レベルの低い話で、藤田さんにおわびしなければいけません。以上です。

橋間 どなたかお答えする方はおられますか。(笑) 瀬戸内海から来られた方で、おれのところだと言う人がおられたら。

藤田 全く見当もつきませんが、瀬戸内海の島々の映画では大林宣彦が尾道出身で「尾道三部作」がありますね。その中で瀬戸内海の間人間関係、人間模様を描いておられますから、もしかするとあのあたりではないかと。全くいいかげんなことで、がっかりさせて申しわけありません。

橋間 どこもいいですね。私はそんな気がします。つい先日、広島へ行きまして、リーガロイヤルホテルの上へ行きますと瀬戸内海が見えます。広島から海が見えるとは思いませんでしたけれども、上から見るのはいいですね。

有名なものでは鷺羽山もいいし、高松から見る北側の景色もいいし、甲乙つけがたいと。瀬戸の花嫁はどこか知りませんが、どこでもいいぐらい、いいものをたくさん持っていると思います。

この本の2ページ目ぐらいに、鞆の浦の写真があります。このあたりで『竹原舟遊記』が生まれたのかもしれませんが。参考にしていただければと思います。

瀬戸内海の海の景色を議論していると切りがないと思いますけれども、ここに「山紫水明。継ぐに蒼然の色を以てす」と書いてあり、まさにいま先輩が言われましたように、漢詩を朗読するというのは本当にいいものですね。これを機会に、ウォーターフロント開発の議論をするときには「山紫水明。継ぐに蒼然の色を以てす」等から始めたいと思います。

万葉集についてはフジモリさんが得意だし、いろんな方々がおられると思いますけれども、実は俳句は木本英明さんがいろんな歌をつくられています。4人に対しては幾らか紹介されていますけれども、木本さんから俳句の話をしていただけますか。

木本 大分酔っぱらってきました。いまご紹介いただいて恐縮していますが、その前に山紫水明ですが、ご案内のとおり日本は春夏秋冬、冬は雪が降り、夏は暑くなってセミが鳴く、秋には虫が鳴いたりきれいな花が咲き、本当にいい国だと思います。

数年前にヨーロッパに行くことがありましたけれども、ハンガリーの人に「セミは鳴いていますか」と言うと「セミって何ですか」と聞かれました。日本大使館のある人は「セミはこの辺では鳴かない。地中海周辺ぐらいで鳴くのかな」というようなことを言っておられました。これも皆さんご案内のとおり、欧米人にとってはセミとか虫の音は騒音に聞こえるらしいのです。それが我が国では、そういったものに全部ポエムを感じます。

万葉の時代から、春夏秋冬の風景とかいろんなものを和歌や歌で詠んできていますね。その発展が俳句にもなってきていますけれども、我々のDNAとして自然とかいろんなもの

ろもろの現象を全部情緒といいますか、ポエムに感じるものが我々の血の中に流れている気がします。

いま思い出したんですけれども、『国家の品格』を書かれた藤原正彦先生は情緒が非常に大事だということをおられます。革命的ないろんな発明なり改革は、情緒的な人間から出てくるということを書いておられるのを読みました、私も全くそのとおりだと思います。やっぱり日本人の特質というか、そういったことは池田先生が書かれた『山紫水明』の本の中にも出ていました。

そういうことで、我々日本人には欧米人にはない情緒もあります。最近の世相はがさつになってきた感じがしますが、我々のDNAの中には自然を大事にする、ポエムを感じるものがあるわけですね。社会、教育あるいは家庭の中でそういったものを大事にしていくことが大変重要でないかと思います。

ウォーターフロントも、私は41年に運輸省に入りましたが、そのころは高度成長のころで、港湾貨物量の需要推計5カ年計画をつくって、5年ごとに推計するんですけれども、大体3年ぐらいたちますと5年推計値を達成してしまうような時代でした。ですから臨海工業地帯、重化学工業地帯の工業港をつくる、コンテナ船の時代になったのでコンテナバースをどんどんつくる、いわゆる物流と生産に特化したような港湾づくりをやってきました。それが50年代に入ってから、やはりそれではだめだということで、生活機能といいますか、人々がにぎわう空間をつくる、憩い安らぐような水辺空間や海辺空間をつくっていかうということになりました。それで今はウォーターフロント開発協会もできましたし、全国の港、港で実に豊かな港湾空間の形成がなされるようになってきたことを大変うれしく思います。

ちょっと長くなってごめんなさい。昭和51年か52年ごろに、アメリカの港湾視察に行かせてもらったことがあります。どこの港だったか忘れましたが、車で走っていると、青地に白字でパブリックアクセスと書いてありました。今ならすぐわかりますけれども、当時は何のことだと。読めば一般市民の出入り口みたいなことですが、行った先に何があるのかということでその道を入っていきますと、すばらしいウォーターフロント、緑地公園とかプロムナードがありまして、アメリカ市民がそこで三々五々いろいろ遊んでいました。

私はそのとき一種のカルチャーショックを感じました。それまで物流と生産空間づくりを一生懸命やってきましたから、こういう空間が港湾の中にあるんだということを感じまして、帰ってきてから日本もそういう方向に行かなければいけないというふうに思いました。幸い昭和60年に「21世紀の港湾」という長期ビジョンが出されて、そこで「豊かなる港湾へ」というような副題だったと思いますが、ウォーターフロント開発にも大いに力を入れてやろうということになりました。それも私に言わせれば、欧米人にはない日本人のポエムを感じるDNAがあるから、そういう方向にどんどん整備していかうというふうになったと感じています。

ウォーターフロント関係者の方は質の高い港湾をつくとともに、やはり市民のための心の豊かさを求める空間でもあると思いますから頑張ってくださいと思います。

橋間 木本さん、どうもありがとうございました。木本さんの話を聞きながら思ったのですが、日本はやはり春夏秋冬、非常にいいものを持っていると思います。

ちょっとご紹介しますが、池田さんから教えてもらった曹洞宗をつくった道元の歌でこういうものがあります。「春は花 夏ほととぎす 秋は月 冬雪さえてすずしかりけり」と、四つの季節を詠んだいい句だと思います。それから、良寛の「かたみとて何か残さん 春は花 山ほととぎす 秋はもみじ葉」もいい歌だと思います。

池田さんからこういうことばかりを聞いていまして、ウォーターフロント開発のためにはこういうことを考えながらやりたいと思ったということです。

時間が過ぎましたけれども、木本さんにたくさん俳句をつくっていただきました。私も4人には配っていますけれども、この中から自分が好きな俳句を選んで朗詠してくれということがありましたので、私から先に言っていますか。

木本 実は池田先生のほうから「最後に木本さんのつくった句を披露するから、何としてもつくってきなさい」と言われました。1週間ぐらい前に連絡を受けて、先生がおっしゃるからしょうがないということで仕事の合間を見ながらつくりました。1句だけでいいと言われましたが、いろいろ考えていますと7句ぐらいできて、それを持ってくるのでそれぞれ好きなものを読んでくださいということです。よろしくお願いします。

橋間 この七つの句はいずれうちのメールマガジンで皆さんに流します。

木本 そんな恥ずかしいことをしなくてもいいですよ。

池田 やっぱり好きなものを書きます。

橋間 たくさんありますけれども、ちょっと見にくいと思いますが、三つを読みます。

「昏れなずむ島々浮かべ皐月波」が池田さんの選ばれた句です。

藤田さんは「展帆のマストをかすめ夏つばめ」です。

私は「沖遠く船の行き交ふ青岬」です。

あと四つありますけれども、これを皆さんと一緒に朗詠しましょう。

昏れなずむ島々浮かべ皐月波

展帆のマストをかすめ夏つばめ

沖遠く船の行き交ふ青岬

以上でございます。(拍手)

山紫水明というのはこの美しい景色を言うんですけれども、実は“山紫水明のとき(刻)”という言い方もあるそうです。日没の1時間前ぐらいの海の景色を言うらしく、この本(『山紫水明』)に書いてあります。この本は船に乗る方にはプレゼントしていますが、船

に乗らない方にはプレゼントしていませんからぜひお買い求めいただければと思います。
1890 円のところ、会員価格で 1500 円でさらにコストダウンしていますからぜひ買って
いただきたいし、ほかの方にも勧めていただきたいと思います。

それでは、“山紫水明のとき”をこれから味わっていただくために船に乗っていただきま
す。4時40分出航ですけれども、できるだけ早めに乗っていただければと思います。どう
もありがとうございました。(拍手)

—了—